

用語集を作ろう

— 用語集作成にあたってのポイント —

Let's edit a glossary. --Points for editing glossaries-- Inconsistency of notation for the same matter/thing in manuals (product manuals), general business documents, rules, papers, newspaper/magazine articles, even novels makes the reader (user) uncomfortable, irritated and/or erroneous. This means that the qualities of the writer (publisher of the document) are questioned. For keeping consistency of the terminology notation, a glossary is indispensable. However, editing the glossary has many problems to overcome. Consider these problems and how to make them.

有限会社 アトリエ・ワン

Atelier Bow-Wow

貝島良太

Ryota KAIJIMA

取説(製品マニュアル)はもちろんのこと、一般的なビジネス文書、規則書、論文、さらには新聞・雑誌の記事、小説でさえも、不統一な用語表記は、読み手(ユーザー)を不快にさせたり、イラつかせたり、ときにはミスリードしてしまうこともある。このようなことは、書き手(文書の発行元)の資質が問われることになりかねない。用語の表記統一のためには、用語集が必須である。しかし、用語集の制作には克服していかなくてはならない多くの問題点がある。これらの問題点と作り方を考察してみよう。

1. はじめに

筆者は、マニュアル文をはじめ一般的なビジネス文書の執筆時における疑問点や注意点を、2009年から1年に1テーマ、この場で研究発表をしている。今年はその9回目である。2009年(第1回目)のテーマは、「ください/下さい」の使い分け^[1]であった。2010年は、助数詞の「ka」^[2]、2011年は、研究発表が中止。2012年は、ら抜き言葉^[3]、2013年は、句点と閉じ括弧^[4]、2014年は、接続詞の考察^[5]、2015年は、横書きの文章における句読点についての考察^[6]、2016年は、複合動詞への送り仮名の付け方^[7]、そして2017年は、箇条書用の項目番号の付け方^[8]であった。これらの発表論文は <http://www.bow-wow.jp/sht3/data.html> の項番021か

ら028に掲載してあるので、参考にしていただければ幸甚である。

さて、今年のテーマは、**用語集を作ろう**である。取説(製品マニュアル)をはじめ、一般的なビジネス文書、規則書、論文、新聞・雑誌の記事、さらには小説のような情緒的なものでさえも表記の統一がされていないと、読み手(ユーザー)をまごつかせたり、イラつかせたり、ときには間違わせたりする。不統一な用語で書かれた文書は、書き手(発行元)の資質が問われかねない。文書で一番重要なのは、もちろん中味が正しく伝わるかであるが、表記も重要である。

次の文は、以前筆者が量販店で購入した懐中電灯(中国製)に付いていた取説の一部分で、電池交換に関する

る文章である。

『バッテリーは2本とも同じメーカーの新品のアルカリ電池に交換して下さい。バッテリーのプラスとマイナスは、電池ケースのマークに従い正しく入れてください。』

というものである。もちろん、何を言おうとしているのかはよく分るから、取説としての所期の目的は達していると思う。クダサイの表記がばらついていることもさることながら、「電池＝バッテリー」ということを知らない人が読んだら、きっと戸惑うはずである。用語が統一されていないからである。

文体(ですます体/である体)の混在や送り仮名の不統一、軽微なワープロの誤変換などは、意味が通じる限り、読み手に失笑されたとしても無視されることが多い。しかし、これが、文書中にある専門用語で起きたら事情は異なってくる。専門用語の中でも、片仮名表記に含まれる長音符の有無、送り仮名の有無や漢字/平仮名の不統一などは、とりあえず意味は通じることが多いから、書き手の恥程度で済むかも知れない。しかし、「入力」と「インプット」、「軸受」と「ベアリング」のように同一の事柄を漢字(日本語)表記、片仮名表記が混在すると、読み手(翻訳者のこともある)を、その表記の違いに何か書き手の意図があるのかと悩ませるかも知れない。これら表記の不統一は、既存文書の部分修正をする場合に起きがちである。そこで必要になるのが、用語表記を統一するための規則書となる(専門)用語集である。用語集にある言葉は、そのとおりに表記しなくてはならないのはもちろんであるが、同種言葉はたとえ用語集になくても気を利かせて(良い意味での付度をして)表記を統一しておいた方が好ましい。例えば、software の対応語が「ソフトウェア」と用語集に記載されていたら、middleware の対応語がその用語集に載ってなくても(「ミドルウェア」としないで)「ミドルウェア」と表記しておくほうがよい。

2. 用語集と辞書・辞典とのちがいは

話を進める前に、「用語集」の元となる「用語」や「辞書」「辞典」などについての説明(定義)を見ておこう。いずれも「スーパー大辞林」^[9]よりの引用である。

【用語】使用されている言葉。特に、ある人や分野などにもっぱら用いられる字句。術語。「哲学-」

【辞書】①多くの言葉や文字を一定の基準によって配列し、その表記法・発音・語源・意味・用法などを記した書物。国語辞書・漢和辞書・外国語辞書・百科辞書のほか、ある分野の語を集めた特殊辞書、ある専門分野の語を集めた専門辞書などの種類がある。辞典。辞彙(じい)。語彙。字書。字引。②仮名漢字変換方式のワードプロセッサにおいて、仮名に対応する漢字を登録しておくファイル。あるいは、自動翻訳システムにおいて、単語間の対応や文法を記録しておくファイル。③辞職の意を記した文書。辞表。「この頃大弑-奉りたれば/栄花見はてぬ夢」

【辞典】いろいろな言葉を集めて一定の順序に配列し、その表記法・発音・語源・意味・用法などを記した書物。辞書。じびき。「国語-」「英和-」

【事典】①事物や事柄を表す言葉を集めて一定の順序に配列し、解説を施した書物。「百科事典」や「人名事典」などのように用いられる。②〔周礼〕国家の諸種の事務を規定した法典。

【字典】漢字を集めて一定の順序に配列し、その読み・字源・意味・用法などを記した書物。漢字の辞典。字書。字引。もじてん。

残念ながら「用語集」については見出し語が立っていなかったもので、研究社 新和英中辞典^[10]で「用語集」の英訳を引用してみたところ、

【用語集】用語集<用語>glossary

とある。これを、Oxford 英英辞典^[11]で調べてみた。

Gloss·ary/ 'glásəri; NAmE'glɔ:s-; 'glá:s-/noun (pl.-ies) a list of technical or special words, especially those in a particular text, explaining their meanings.

とあり、その専門分野の用語と説明を記載されたリストのことと説明されている。

以上のことでは、用語集と辞書・辞典との違いはあまり明解ではないが、筆者の解釈はこうである。即ち、ある事柄について、辞書や辞典では、見出し語に立てた表記(筆者はこれを標準表記と呼ぶ)のほかに、「○○ともいう」とか「⇒○○」あるいは「○○のこと」のような表現で、別の表記(筆者はこれを異表記と呼ぶ)の記載が説明部分にあることがある。辞書や辞典は可能な限り多くの語彙を収録する方が知識の源泉たり得るから、一つの事柄に複数の表現を収録することが多い。したがって、

辞書や辞典用語集として使うと、一つの事柄を複数の表記(呼称)で記載しても構わないことになり、表記がぶれて読み手の誤解を生じかねないリスクがある。一方、「用語集」と銘打ったものは、ほとんどが一つの事柄は、一つの見出し語しかなく、用語表記の統一に好都合である。

しかし、名称自体が分からない場合は、用語集や辞書・辞典が役に立たないこともある。例えば、**図1**の金具の名称をあなたはご存知だろうか。大工さんや金物店の人は別にして、物は知っていても名称は知らないという人がほとんどであろう。これを購入したいときは、金物屋かDIYショップに行き、店員に「こういうのありますか」などとスケッチや古い実物を見せたり、ジェスチャーを交えて言葉で説明したりして売り場に案内してもらい、ようやく名称が分るのである。この金具の商品名は「ヒートン」(英語名称は eye bolt)である。ちなみに同じ商品棚にある「？」形のは「洋灯釘/洋灯吊/ヨートー/ヨート」、「L」形は「洋折釘」である。かつて西洋から渡来したランプは「洋灯」と呼ばれ、これを天井や柱に吊り下げるための金具が作られ、その名称を「洋灯吊」としたのが始まりと思われる。名称には、部分の名称もある。例えば、眼鏡フレームの**図2**の矢印で指した部分の名称をご存知だろうか？答えは「ち(智)」、対応英語は lug または endpiece である。JIS工業用語大辞典^[12]には眼鏡の説明図があり、眼鏡の部分名称が記載されている(**図3**)。



図1 この金具の名称は？

名称をあなたはご存知だろうか。大工さんや金物店の人は別にして、物は知っていても名称は知らないという人がほとんどであろう。これを購入したいときは、金物屋かDIYショップに行き、店員に「こういうのありますか」などとスケッチや古い実物を見せたり、ジェスチャーを交えて言葉で説明したりして売り場に案内してもらい、ようやく名称が分るのである。この金具の商品名は「ヒートン」(英語名称は eye bolt)である。ちなみに同じ商品棚にある「？」形のは「洋灯釘/洋灯吊/ヨートー/ヨート」、「L」形は「洋折釘」である。かつて西洋から渡来したランプは「洋灯」と呼ばれ、これを天井や柱に吊り下げるための金具が作られ、その名称を「洋灯吊」としたのが始まりと思われる。名称には、部分の名称もある。例えば、眼鏡フレームの**図2**の矢印で指した部分の名称をご存知だろうか？答えは「ち(智)」、対応英語は lug または endpiece である。JIS工業用語大辞典^[12]には眼鏡の説明図があり、眼鏡の部分名称が記載されている(**図3**)。

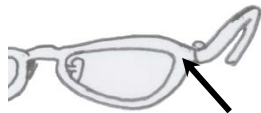


図2 この部分の名称は？

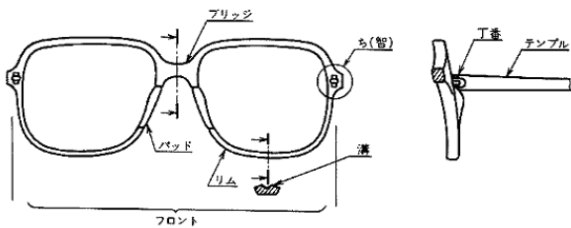


図3 B7280 メタル枠の図 (pp.2240 より)

JIS工業用語大辞典は、用語、読み・説明文・対応英語・説明図・慣用語(異表記)・分野番号などを記述したとても立派な用語集である。しかし、実際に技術翻訳で

対応英語を調べるときなど、正しい訳語に辿り着くのにけっこう手間がかかることがある。というのも、JISでカバーしている工業分野は上述の眼鏡などの軽工業品から、紙、繊維、土木、機械、化学、電子、鉄道、船舶、ロボット、鉄鋼、自動車、航空機、原子力まで、実に広い。そのため、別の分野では同じ事柄を別の表記にすることがよくあり、それらすべてが記載されている。対応

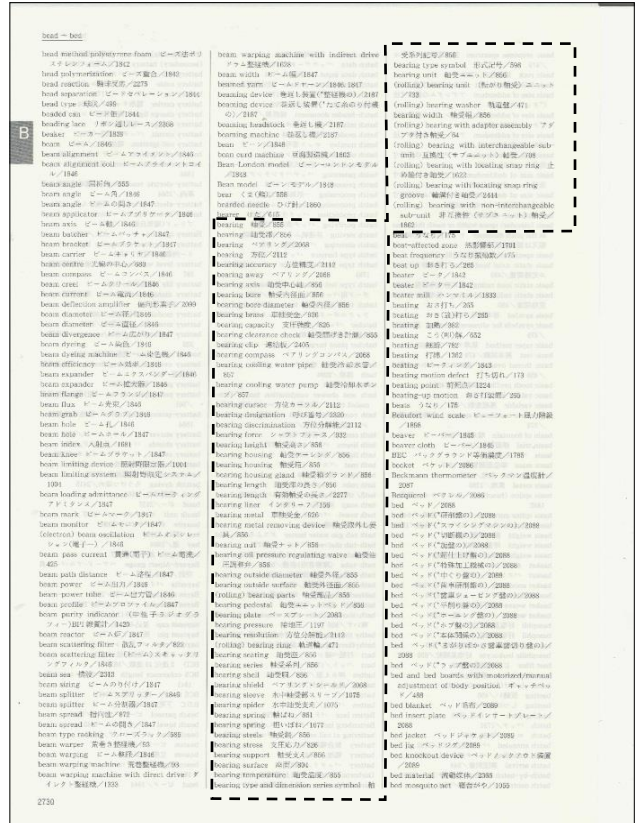


図4 JIS工業用語大辞典 第5版 英和索引 bead~bed (pp.2730 より)

英語が bearing で始まる用語を例に見てみよう。**図4**の点線で囲った部分が該当箇所である。bearing に対応する日本語に次のようなバラエティーがあることが分る。

ベアリング、軸受、軸受部、支圧、ベース、車軸受、接地、担い、方位、連結、有効軸受、シャフト、座

分野が分らないと、正しい訳語が分らないということである。27万語をこえるこの大辞典は、用語検索では一見頼もしく思えるが、A4版3,181ページ、厚さ9cm、重さ5kgの本で、書棚での出し入れや辞書引きには、却って扱いづらい。収録分野が広すぎるのも考え物である。

3. 用語集に何を求めるか

通常、私たちが「用語集」を選ぶときに求めるのはどのようなことか考えてみよう。

先ずは、**分野**である。これが違っていると論外である。森羅万象の中で「工業」に絞ったとしてもまだ相当範囲は広いので、上述のように様々な正式名称(標準表記)があり、最適なものを選ぶのに手間がかかることから、もっとずっと狭い分野に限定した用語集を利用する方が得策であろう。

次は、**発行者**であろう。権威づけは嫌ではあるが、こと用語集に関しては、誰(どの団体や組織)が編集・監修・発行したのかは信頼の裏付けとして大いに重要である。

発行時期にも注意をはらう必要がある。とくに、情報、医療、新素材などの先端分野の用語集は、発行されて数年も経てば、新技術の用語が収録されていないので、たちまち時代遅れになってしまう。自分で知っている新しい言葉が収録されているかをチェックしてみるのも、一つの判断基準となる。

収録語数も重要な要素である。ただし、百科事典的に膨大な語数に惹かれるのは、前述のごとく、かえって検索し難くなったり、表記の統一がし難くなったりするので、要注意である。

しかし、本当に重要視すべきは、そのときの**使用目的**に合致しているかどうかである。以下に、考えられる用語集の使用目的を列举してみよう。

3.1 標準表記を調べる。漢字、平仮名、片仮名、送り仮名、長音符の有無、連鎖語の表記(中点/スペース/連結)、数の表記(漢字/アラビア数字)、全角/半角……を調べる/確認する。

3.2 漢字の読みを調べる/確認する。

3.3 同義語(異表記)を調べる/確認する。

3.4 名称自体が不明なとき、ビジュアルディクショナリー英和大辞典^[13]やワーズ・ワード 絵でひく英和大図鑑^[14]などで、図や写真から物の**名称**を調べる。

3.5 意味/定義(説明)を調べる。

説明文、図(全体図・引き出し線と呼称入り図・爆発展開図・断面図・模式図・変化図など)、写真、動画、音声、表、式(化学式・数式)などで理解度を上げられる。品詞情報や分野情報も役立つ。

3.6 翻訳に使う。即ち訳語を調べる。英語の場合は、表記(英綴り/米綴り、アラビア数字/(数字を)スペルアウト、略号、ハイフン/スペース)などを調べる/確

認する。標準表記(正式表記)/異表記(通称・現場言葉・略号・表記の乱れ)、発音記号を調べる。

3.7 電子版/WEB版があるか。あるならば……。

3.7.1 完全一致はもちろん、前方一致(〜で始まる)・中間一致(〜を含む)・後方一致(〜で終る)など多彩な検索/置換ができるか。

3.7.2 「読み」「漢字」「対応外国語」などから多彩な検索ができるか。

3.7.3 辞書代わりに意味/定義を調べられるか。説明文、図(全体図・引き出し線と呼称入り図、爆発展開図、断面図、模式図、変化図など)/写真/表/式(数式・化学式)の表示、動画/音声などの再生などできるか。

3.7.4 品詞や文法情報、外国語の場合は発音記号や活用形などの情報も表示されるか。

3.7.5 標準表記(正式表記)/異表記(通称・現場用語・略号・表記の乱れ・英語/米語の違い)などの表記と異表記からの検索ができるか。(空振り検索対策用として)

3.7.6 分野・出典情報があるか。複数の用語集を串刺しにして使用する場合、表示されたものの典拠が表示されるか。

3.7.7 その電子用語集を辞書にして、文書チェック・修正、翻訳(訳語付与)に利用できるソフトはあるか。

等々、電子版ならではの豊富な検索方法や辞書機能、さらに翻訳や用語チェックなどにも利用できるか(これは、用語集ツールソフトの仕様に用語集の内容と編集の仕方が合致したものでなくてはならないが)、百科事典的にも使えるかなど、要求(夢)は広がるのである。夢を広げるのは楽しいが、実際にそのような万能用語集を作るのは、人手、資金、時間など際限がなくなり、およそ現実的でない。

さて、際限のない用語集への欲求ではあるが、適当なところで収録項目(標準表記、読み、対訳語、異表記、簡単な説明文と画像……)に留めるとして、以下に用語集を作る手順を述べる。

4. 用語集をつくる

a. 用語集のタイトルを決める

分野を決めたら、まずその用語集に適切な**タイトル**を決めることである。コンピューター、医学、機械など広大になると予想されるものは、小分類/細分類から始めることをお薦めする。したがって、タイトルは例えば、エクセル用語集、眼科用語集、自動車エンジン用語集のようにある程度絞り込んだほうがよい。そうしないと、その用語集はいつまでも完成しない。部分完成を集めて、全体に近づく方が、できたところから使えるので、早く成果を味わえるし、問題点が見つかったとき、後戻りしやすい。部分的にでも完成すれば、具体的方針を決め、人を増やし教育をして、質を保ったものを早く完成できる。

b. 語彙の収集

用語集であるから、次にやることは語彙の収集である。既存のものでよさそうなものがあれば、単独で使うのが最も簡単である。既存のものが複数あるのが昨今当たり前であるから、本や Web 上で幅広く収集する。

適当な用語集がそろわない場合など、用語を収集するのに役立つのが教科書や解説本である。教科書や解説本から用語を抽出すると、収集する用語の範囲と深度のバランスがとれたものになる。ここでいう用語の範囲(広さ)とは、例えば、「右心房」も「左心房」も収録されていることである。深度とは例えば、「右心房」は収録されているが「心室」はないというような場合である。要するに、用語集のタイトルにふさわしい範囲の用語が、上位語から下位語にかけて網羅されていることが、大切である。

一とおり収集したところで、全体にざっと目を通し、発行元、語数、訳や説明の有無、発行時期などを**一覧表**にしてみる。その際、自分が知っている当該分野の最新用語や専門用語を2、3個それぞれの用語集に収録されているかチェックすることで、各用語集に対する個人的評価の一助になろう。この一覧表を作ることで、重複ありの場合の語彙数が把握でき、その後の作業工数の予想に役立つ。以上を踏まえて、集めた用語集をエクセルなどの表計算ソフトに端から入力する(電子データがあればコピーできるので楽である)。入力項目としては、読み、見出し語、訳語(あれば)、説明、典拠など

は必須項目である。特に、読みは後で見出し語を50音順にソートするときに便利であるが、平仮名/片仮名(全角)/片仮名(半角)のいずれかに統一して記載しておかないと気持ちの良いソートができない(筆者は片仮名(半角)を推奨する。エクセルの読み用列幅の最小化のためである)。訳語があれば、翻訳に利用できる。典拠は、複数の典拠があるときに選択時の判断基準になる。

c. 暫定版作成

とりあえず収集した用語集を、エクセルなどの表計算ソフトに入力し、読みや見出し語でソートすることで、見出し語の重複と表記のばらつきが分ってくるはずである。まずは、完全に同一のものはひとつだけ残し、重複をなくしておく。収集した用語集が多ければ、この段階で残った見出し語数は収集したものの数分の一になることもある。

表記統一をしておくのは重要である。集めた既存の用語集に訳語も付いているのなら、訳語も入力し、ソートすると、同じ訳語に異なる日本語が当てられていることもあるのに気付くはずである。このようなことを繰り返すことで、表記のばらつきが分り、どの表記を標準表記にするのがよいかを決めるきっかけをつかめる。

d. 標準表記の規則を決定する

収集した用語は用語集や解説書など会社/団体/組織の方針で同じ用語でも異なる表記になっていることがある。例えば、V音に「ヴ」を当てるかどうかとか、**-er/-or**などに長音記号を当てるかどうかである。さらに、コピー/複写、インプット/入力など外来語(片仮名)にするか漢字にするかなどを決めておかななくてはならない。英語の場合は、英綴り/米綴りのどちらにするか、名詞連鎖の時、1スペースを入れるか、ハイフンでつなげるか、それとも続けて1語にするかなどである。ともかく細かいところまで規則を決めておかないと、語彙は豊富でも、バランスが悪くて使い物にならない用語集ができあがってしまう。同一の事柄は、もちろん同一の表記にしなくてはならないが、同様な事柄も同一の表記規則で記載されていなくては統一性のある用語集とはいえない。たとえ、個々には正しくても、横並びにしたと

きに表記規則が異なっているのは用語集としては失格である。

interface 【《動》interféis 《名》interfèis】の日本語表記(片仮名)について複数の用語集/辞書における見出し語の表記がいかにバラついているかを見てみよう。

まず、前半のinterの-erを「一」にするかしないか、次に後半のfaceを英語の発音どおりにフェイスとするか、「一」にするかである。したがって、理論的には、順列組合せで、次の4種類になる。実際にも4つとも公式に使われている。

- ① インターフェース (一般紙系)
- ② インターフェイス (Microsoft 系、TC協会)
- ③ インタフェース (JIS系主流)
- ④ インタフェイス (JIS系亜流) である。

①は、「記者ハンドブック」、「朝日新聞の用語の手引」、「毎日新聞用語集」、「読売新聞用事用語の手引」、「大辞林」、「日本語になった外国語辞典(集英社)」のほか、weblio中の多くの電子辞書の見出し語になっている。この表記が一般的に一番普及していると思われる。

②は「Microsoft Bookshelf」、日本マイクロソフトが運営している「.NET Framework 用語集」、「日本語スタイルガイド(TC協会)」などが採用している。

③は、「JIS工業用語大辞典」にある多くの規格で採用されている。

④は、「JIS工業用語大辞典」の中で、B0133-5202などで、「インタフェイス機器」のような記載がある。このように、所属機関により、標準表記が異なっているので、自分の方針を立てないで単に収集した用語を自然体で登録すると、個々の語では正しくても、全体としては表記の統一がないものになり、用語集としては好ましくない。

e. 標準表記と異表記を規則化する

標準表記/異表記というと、外来語を片仮名で表記するときの決め事(1991年6月28日発行の内閣告示第2号「外来語の表記」にある原則と慣用を容認する場合を標準表記にするようなこと)だけではない。以下に示すのは、かつて(財)日本規格協会(JSA)のCD-ROM版JIS工業用語大辞典(第5

版)^[15]の制作にあたり、筆者がJSAと協議し決めた規則である。**表1**は日本語用が30項目、うち15項目は外来語の片仮名表記に関するものである。

表2は、英語の表記についてで、全部で10項目ある。なお、これらはあくまで原則であるので、例外も結構ある。下表において、→の左には標準表記、右にはその語の異表記を例示してある。

表1 標準表記と異表記(日本語)

1	解説欄から異表記へ 解説欄の【慣】または、「ともいう」で書かれている用語は異表記とする。
2	()の排除 標準表記に()は用いない。()が付いている場合、()内の語を省略した表記を標準とし、付与したものを異表記とする。[例] 見出し語:落下(事故) 落下→ 落下事故、落下(事故)
3	省略形 省略なしを標準表記とし、省略形または略号を異表記とする。[例] フロッピーディスク→ F/D、FD、フロッピー
4	漢字の扱い 常用漢字外なので片仮名を使用する場合と、平仮名や片仮名で表記されているが該当漢字がある場合は、平仮名表記を標準表記とし、漢字表記を異表記とする。[例] 見出し語:可とう(撓)管 可とう管→ 可撓管、可とう(撓)管
5	和語の優先 和語と片仮名表記がある場合は、和語を標準表記とする。[例] 立上げ→ スタートアップ、立ち上げ
6	送り仮名 送り仮名を最短化したものを標準表記とする。音読みがある場合は、音読みの方を優先する。[例] 書込み→ 書き込み、書込、書きこみ
7	似た漢字の扱い 意味が似ている漢字がある場合、異表記に加える。[例] 機械→ 器械 形式→ 型式
8	数字の扱い① ローマ数字は、アルファベットの I(アイ)、V(ブイ)、X(エックス)を標準表記とし、I、II、IIIなどの特殊文字は異表記とする。[例] I→ Ⅰ、II→ Ⅱ、IV→ Ⅳ、IX→ Ⅸ
9	単位 単位記号を標準表記とし、片仮名表記を異表記とする。ただし、標準表記はアルファベットの組合せを用い、ml、cm、kgなどの外字は異表記とする。大文字、小文字を正しく使用したものを標準表記、間違っただけのものを異表記とする。[例] ml→ ml、ML、ミリリットル、ミリ
10	ギリシャ文字 ギリシャ文字そのものを標準表記とし、片仮名表記を異表記とする。[例] γ→ ガンマ、ガンマー
11	固有名詞の扱い 固有名詞は片仮名表記を標準表記とし、言語をスペルアウトしたものを異表記とする。[例] ウィグナー効果→ Wigner効果
12	数字の扱い② 漢数字を含む語は、漢数字を標準表記とし、算用数字を異表記とする。[例] 二重系→ 2重系 三重構造→ 3重構造
13	格助詞入りの語 格助詞の入ったもの(例:～の…、～を…)を異表記とする。品詞が変化する可能性もある。[例] システム立上げ→ システムの立上げ、システムを立上げ
14	中点 中点(・)のないものを標準表記とする。[例] クローズリミットスイッチ→ クローズ・リミットスイッチ、クローズ・リミット・スイッチ
15	外来語のスペース スペースのないものを標準表記とする。[例] クローズリミットスイッチ→ クローズ リミットスイッチ
16	外来語の長音符① 外来語を片仮名表記する場合は、語尾等の長音符を省略したものを標準表記とする。[例] インタフェース→ インターフェース
17	外来語の長音符② 原語を片仮名表記する場合は、長音符を表記したものを標準表記とし、母音字で表記したものを異表記とする。[例] インタフェース→ インタフェイス
18	外来語の拗音 片仮名の拗音がある場合は、小さな字を標準表記とする。[例] ソフトウェア→ ソフトウエア
19	外来語の促音 促音表記がある場合は、異表記とする。[例] メソッド→ メソド、メソド ストレージ→ ストレッジ、ストレージ
20	外来語の扱い 外来語を片仮名表記する場合、イ列・エ列の音

	の次のアの音に当たる用語については、アを標準表記とし、ヤを異表記とする。[例] ギア→ギヤ
21	外来語の扱い 外来語ファ、フィ、フェ、フォを片仮名表記する場合、ハ、ヒ、ヘ、ホに変えたものを異表記とする。 [例] インフォメーション→インホメーション
22	外来語の扱い 原語の接頭語 ex-を片仮名表記する場合、エクセ-を標準表記とし、エクゼ-、エクス-、イクセ-、イクゼ-、イクス-を異表記とする。[例] エクセキュート→エクゼキュート、エクスキュート、イクセキュート、イクゼキュート、イクスキュート
23	外来語の扱い 外来語ティ、ディを片仮名表記する場合、チ、ジを標準表記とし、テイ、ディを異表記とする(例外あり)。 [例] スチーム→スティム
24	外来語の扱い 原語の xe-を片仮名表記する場合、キセを標準表記とし、クセを異表記とする。[例] キセノン→クセノン
25	濁音① ジ、ズを標準表記とし、ヂ、ヅを異表記とする。 [例] ディーゼルエンジン→ディーゼルエンヂン
26	濁音②V音について バ、ビ、ブ、ベ、ボを標準表記とし、ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォを異表記とする。 [例] パキュームクリーナ→ヴァキュームクリーナ
27	外来語の扱い 原語の ge-を片仮名表記する場合、ゼを標準表記とし、ジェを異表記とする。 [例] ゼネレータ→ジェネレータ
28	外来語の扱い 原語を片仮名表記する場合は、接頭語 re-については、レを標準表記とし、リを異表記とする。 [例] レポート→リポート レヒート→リヒート
29	外来語の扱い 原語の en-を片仮名表記する場合、エンを標準表記とし、インを異表記とする。 [例] エンクロージャ→インクロージャ
30	外来語の扱い 原語の -nium を片仮名表記する場合、ニウムを標準表記とし、ニュームを異表記とする。 [例] アクチニウム→アクチニユーム

表2 標準表記と異表記(英語)

1	()の排除 標準表記に()は用いない。()内の語を省略した表記を標準とし、()内の語に置き換えた表記を異表記とする。 [例] type dust collector (separator)の場合は、意味を考え type dust collector→type dust separator
2	スペル① スペルアウトしたものを標準表記とし、略号を異表記とする。 [例] floppy disk→F/D, FD
3	スペル② 英語と米語でスペルが異なるなど複数のスペルがある場合 [例] vapour→vapor -sation→-zation
4	スペル③ 単・複数形や動詞の活用が不規則変化をする場合(特に用語の頭・用語の中の単語) [例] knife→knives pressure break→pressure broke, pressure broken
5	同義語 意味は同じ単語が複数ある場合 [例] function→facility test→check
6	ハイフン 最新の辞書通りのものを標準表記とし、逆のものを異表記とする。[例] 32-bit→32 bit digital video-interactive→digital video interactive
7	スペース スペースのないものを標準表記とする。 [例] ELBUS→EL BUS
8	ギリシャ文字 ギリシャ文字は、フルスペルを標準表記とし、ギリシャ文字そのものを異表記とする。[例] gamma→γ beta→β
9	数字の扱い 標準表記は、スペルアウトしたものとし、算用数字を異表記とする。 [例] two-dimensional array→2-dimensional array
10	単位 単位記号を標準表記とし、スペルアウトしたものを異表記とする。ただし、標準表記はアルファベットの組合せを用い、ml、cm、kgなどの特殊文字は異表記とする。大文字、小文字を正しく使用したものを標準表記、間違っただけのものを異表記とする。 [例] ml→ML, milliliter, mℓ

原則として、CD-ROM版は本(冊子体)の内容と同一にすることにしたが、この電子用語集の目的の一つに、文字列検索/置換がある。冊子体の見

出し語では括弧のある文字列が見出し語に結構多用されている。いわゆる空振り検索をなくすために、電子辞書の見出し語としては、括弧付きの文字列やm²のように1文字の特殊文字はユーザーが同一の文字列を入力して検索する可能性は低いと判断し、見出し語から排除することにした。手間はかかるが、ひとつの標準表記に対して、通常ありそうな異表記は手間を惜みずできるだけ豊富に登録しておくことが、空振り検索を少なくでき、結局は真に役立つ電子用語集に近づくと判断したのである。表記統一には当然、全半角の統一も必要であるが、辞書ソフトの対応で克服できる。

英語で centering という機械用語がある。2台の回転機器を結合するとき2台の回転軸を一直線になるように調整することである。日本語で「シンダシ」というのだが、ほとんどの人が「芯出し」と書く。正解は、「心出し」である。中心の「心」だからである。多分シャープペンシルをカチャカチャノックして、芯を出す感覚に引きずられて間違っただけであろう。したがって、centering に対応する日本語の標準表記は「心出し」であり、異表記は「芯出し、心だし、芯だし、センタリング、センターリング」のようになろう。つまり、異表記には、しばしば起こりうる間違い表記も入れておくと、それに対応する辞書ソフトがあれば、異表記を標準表記に置換すること(間違いの修正)もできるようになる。

表1と表2の内容は、上述のごとくあくまでCD-ROM版JIS工業用語大辞典の制作用に決めたものであるから、前項の◎と①用になっている。工業技術系の人向けの物といえるから、家電品など、一般人向けの取説などのためには、①用にするために、標準表記と異表記の入れ替えをする必要がある。いずれにせよ、上述のような手段を用いれば、目的にあった便利な用語集を作れるのである。

4.6 用語集制作に取りかかる

用語の元データを収集し、標準表記と異表記の規則を決定したら、いよいよ本番の電子用語集(辞書)の制作開始である。辞書ソフトに則した仕様のExcel 入力項目に、暫定版からのコピペをするなどして、用語集編集に取りかかる。張り付けた見出

し語を標準表記/異表記規則と一語ずつ照合し、標準表記ならそのまま、標準表記でないときは、異表記欄に移動し、標準表記を入力する。訳語や説明文、読みなども入れるのなら、該当欄に暫定版からコピーしていくことになる。訳語も訳語用の標準表記/異表記規則に照らし、必要により見直しをしていく。このとき Excel のスペルチェッカーなどを利用してスペルチェックをした方がよい。データをコピーしたとき、十分注意した方がよいのが、余計なスペースやリターンである。辞書には確かに入力したのに、検索しても出てこないときのほとんどの原因はこれである。見出し語の前後の余計なスペース、あるいは中間の1スペースに2スペースが入っていたりすると、検索時に同じ間違いをしない限り目的の見出し語が表示されないことになる。語頭のスペースは目視でも発見できるが、語の後のスペースは見つけ難い。

ひとつとおりでできたら見直して完成度を高めること。

修正に対して常に謙虚な気持ちが必要である。

できれば、用語保守体制を整え、常に最新の用語を追加しておくことが望ましい。企業なら、用語委員会を組織し、新語や種々の提案を一元的に集め、審議・決定・改訂版の発行までを頻度(都度/週・月・半年・年など)を決めて行うことが望ましい。

5. 終わりに

用語、特に専門用語の表記の統一は、文書作成上非常に大切である。それを支える用語集の作成・保守・活用の体制がないと、せつかくの労作が水泡に帰すことになる。業界一丸となって、持続可能な形の体制を作り、文書の品質向上を目指していただきたい。

* * *

本稿の読点は「、」を標準としたが、引用原文に「,」が使用されているものは原文どおり「,」を使用した。

【参考文献】

- [1] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 「下さい」と「ください」を正しく使い分けていますか?—ほかにも「見る/みる」「言う/いう」「置く/おく」などは?—
TCシンポジウム'09 論文集 2009 pp.1-5

- [2] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 3か所?3ヶ所?—
—助数詞の「ka」を正しく表記していますか?—
TCシンポジウム'10 論文集 2010 pp.1-5
- [3] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン ら抜き言葉を考察する—
—あなたは「食べれる」派?「食べられる」派?—
TCシンポジウム'12 論文集 2012 pp.17-21
- [4] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 句点と閉じ括弧の考察—
—「おはよう。」か、「おはよう」か—
TCシンポジウム'13 論文集 2013 pp.36-43
- [5] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 接続詞を考察する—
—表記はひらがな?漢字?接続詞で短文化—
TCシンポジウム'14 論文集 2014 pp.48-56
- [6] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 句読点に何を使いますか?
—^{まる}と、^{てん}ですか?それとも^{ピリオド}・^{コンマ}と、ですか?—
TCシンポジウム'15 論文集 2015 pp.18-25
- [7] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 複合動詞への送り仮名—
—取り扱う?取扱う?取扱?—
TCシンポジウム'16 論文集 2016 pp.31-38
- [8] 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 取説やビジネス文書の項目番号の付け方—
—数字の他、アルファベット、片仮名などは?—
TCシンポジウム'17 論文集 2017 pp.8-15
- [9] 「スーパー大辞林3.0」三省堂 2007
- [10] weblio 研究社 新和英中辞典 <https://eje.weblio.jp/content/>
- [11] Oxford Advanced learner's Dictionary seventh edition ©Oxford University Press 2005
- [12] JIS工業用語大辞典(第5版) 日本規格協会 2001 pp.1394
- [13] ビジュアルディクショナリー英和大辞典 日東書院本社 2012
- [14] ワーズ・ワード 絵でひく英和大図鑑 同朋舎出版 1997
- [15] JIS工業用語大辞典[第5版対応]CD-ROM with SuperHT³ 日本規格協会 2001

有限会社アトリエ・ワン (Atelier Bow-Wow) 取締役 兼 SuperHT ³ 事業室長 貝島良太 E-mail: rkaijima@bow-wow.jp URL: http://www.bow-wow.jp/sht3/
